

卷頭言

建設とマネジメント

今 西 肇



ビジネス、コミュニケーション、マネジメントなど、何気なく意味を理解しているようだが、突き詰めれば理解できていない言葉を我々はよく使う。また、理解していくとも、時代とともに言葉の意味自体が変質しているものも多い。

マネジメント（management）は、どのような分野でもよく使われている言葉であるが、その意味を尋ねられると首をかしげる人も少なくないはずだ。

現代におけるマネジメントとは、主にビジネス上における様々な資源や資産・リスクなどを管理し、経営上の効果を最適化しようとする手法のことだ、マネジメントされるべき対象は「ヒト」「モノ」「カネ」「情報」の4つだと言われている。

それでは、改めてマネジメントの語源を探ってみよう。

語源辞書（Etymology）によると“manage”“management”とは、ラテン語の手を意味する *manus* が語源であり、16世紀中ごろに現れ、「操作する (to handle)」、特に「(馬を) 手で御する (to control a horse)」がその原義だと言われている。乗馬をはじめて経験した人は、まず馬が自動車のように思い通りにならないことを思い知らされる。そう考えると、現代社会の「ヒト」「モノ」「カネ」「情報」も思い通りにならない生き物のようであるからして、managementが必要となる。

これを体系化したのがマネジメントの父と称されるP. F. ドラッカーである。彼はマネジメントの役割を①組織に特有の使命や目的を果たすこと、②仕事を通じて働く人たちを生かすこと、③社会の問題について貢献すること、と定義している。

さて、本特集のキーワードは、「都市環境向上」「都市基盤整備」「地方創生」である。これらは様々な分野の知識や知恵を動員して達成される。これらを紡ぐ糸が、建設マネジメントではなかろうか。建設マネジ

メントは、「社会に幸せや豊かさをもたらすための建設行為を、資源を十分に活用しながら組織的に行い、その使命を果たすこと」であるといえる。

経済成長率（実質GDPの対前年度増減率）が10%を超えていた50年前は、東京オリンピックの開催や東海道新幹線の開業に沸いていた。経済は右肩上がりで、建設産業ももっとも人気のある仕事のひとつであった。しかし、1993年から約20年にわたって続くバブル崩壊やデフレスパイラル現象は、今まで主役であった建設産業の社会的地位や人気を奪っていった。そして、2011年3月11日の東日本大震災が発生したのである。

この東日本大震災の復旧復興において「ヒト」「モノ」「カネ」「情報」を官民一体となって見事にマネジメントしていたのが建設産業であったことも忘れてはならない。それは、建設産業に脈々と受け継がれてきた建設マネジメントの経験である。

今日、人災とも言えるような自然災害の多発、人口減少、高齢化、国際化など、建設産業を取り巻く環境は極めて厳しい状況にある。しかし、マネジメントを支える建設産業に関わる人口の減少やインフラの老朽化に対する十分な解決策は、まだ見つかっていない。

一方、建設産業にとって前向きな話題としては、東京オリンピック開催、被災地の都市再生、インフラストラクチャーの輸出、維持管理やアセットマネジメント、都市のリノベーション事業をはじめとする新たな展開である。

国や自治体、団体、協会、企業は知識と知恵を総動員して次の時代の豊かな国土つくりのための課題を解決しようとしている。

建設マネジメントにより、これらの課題に最適解をもたらすことを期待する。